

## 共創の精神とは

—佐々木塾で考える—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：佐々木塾とは何ですか。

A：（林明夫：以下省略）シャープの元副社長で、ポケットに入る超小型電卓や液晶テレビの開発・事業化で日本の半導体産業の基礎を築き、今年 98 歳になられた佐々木正先生が昨年 10 月からスタートした少人数(15名)の塾です。

昨年 10 月から毎月 1 回、土曜日の午後 5 時まで、東京の半蔵門にあるかんき出版本社の会議室で、ゲスト講師をお招きし、また、佐々木先生の講演もお聴きしながら行う勉強会です。毎回、7 時ごろまで懇親会も開催、ゲストの先生と佐々木先生も御参加です。私は世話人の一人として、ほぼ毎回参加させて頂いております。

テーマは、共に創る、「共創の精神」です。

Q：共創の精神とは何ですか。

A：共に創る、共創の考え方は、佐々木先生が初めて主張なさったものです。異質な人との出会いで得られる「知」や「感性」の研磨が、集まっている人たちの場のエネルギーを高めていく。その時に、共に創る、「共創の精神」を持つことによって、真の大きなリーダーに育つ。佐々木先生は、そのような期待のもとに、この塾を始められました。

共創とは、異なる価値観のものを合わせながら、新たなものを生み出そうとすること。「独創」という独りよがりの考えに固執せず、二つ以上の異なる発想や考えを合わせた「共創」のほうが、そこに参加した人の思いや物語が生まれて、よい結果を招く。このように先生はお考えです。

Q：どのような方々が講師としていらしているのですか。

A：産業界、大学などの教育機関、思想界などで日本を代表する方々をお招きして、これからの日本を担うべき次世代のリーダーを対象に語りかけて頂いております。佐々木先生も毎回講師をおつとめです。

マイクロマシーニングによる集積化センサ、MEMS のオープンコラボレーションでノーベル賞候補、ナノ研究第一人者の江刺正喜・東北大教授。1 兆円企業のアプライドマテリアルズジャパンを育て上げた経営者で、サムスンの元社外取締役を歴任なさった岩崎哲夫氏。産学官共創による新製品の開発で中小企業から 1000 件を超える技術相談を受け、短期間に多数の成功事例を生み出す「仙台堀切川モデル」の堀切川一男・東北大学大学院教授。リーダーシップにおける東洋思想と西洋思想の共創の田口佳史・東洋と西洋の知の融合研究所理事長。フラッシュメモリを

発明し、事業化なされた舩岡富士雄・東北大学名誉教授。世界一の製品を世界のすみずみにを共創精神で目指す医療用精密機器の松谷貫司・マニー株式会社社会長などが3月まで講師をおつとめになりました。

4月以降も、太陽電池の中嶋一雄氏、グローバルイノベーションと共創の松見芳男氏、危機一髪から学ぶ失敗学の中尾政之氏、共創による「貢献力の経営(マネジメント)」の山下徹氏などをお招きする予定です。

**Q：すごい塾ですね。**

A：はい。塾の原点になるような佐々木塾だと、私は極めて高く評価させて頂いております。孫正義氏やスティーブ・ジョブズ氏など日本や世界を代表する方々を育てられた佐々木先生の下には、今でも毎日、国内外から技術者や経営者が教を請いに訪れています。

先日、失礼をもちえりみずに、私の地元の栃木県足利市での講演を御依頼したところ、100歳までは予定がびっしり入っているので、100歳を過ぎたら行ってあげるよとの温かい御返事を頂きました。

**Q：学習塾・予備校・私立学校の経営者の皆様にお伝えしたいことはありますか。**

A：学習サービスや教育機関こそ、子どもたちの人生の成功と正常に機能する社会をつくるために、そこで働く先生と事務職員が保護者や地域社会の皆様と、そして何よりも子どもたちと共に創り上げるべきものと考えます。

これからは、日本だけでなく、世界の様々な国々の学習サービスや教育機関とも、共創の精神でお互いのよさを取り入れながら歩むことが求められると考えます。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：本年度も、第7回全国模擬授業大会が日本最古の学校、足利学校のある栃木県足利市で5月27日(日)に開催されます。

本年は、前日の5月26日(土)にプレイベントの第一部として、「教える力、教務力とは何か」をテーマに、野田塾の小川英範塾長、ヒューマレッジ(旧・木村教育研究会)の木村吉宏代表、ジャスメック(誉田進学塾)の清水貫代表をお招きして講演会とパネルディスカッション。第二部として、「韓国の教育から学ぶ」をテーマに、韓日文化協議会の安長江先生から韓国教育事情についての講演と、韓国の二人の現役高校英語教師による「英語による英語の模擬授業(各50分)」を計画しております。

佐々木塾の共に創る、「共創の精神」の実現を目指したく存じますので、多くの先生方の御来足をお待ち申し上げます。

(お問い合わせ先、開倫塾塾長室 0284-73-7812)

— 2012年3月22日記 —